

# 平成30年度第2回青梅市美術館運営委員会会議録

平成30年10月18日(木)

青梅市立美術館研修室

会議時間 14:00～16:42

出席者 委員6名、教育長

教育部長、事務局4名

- 1 開 会
- 2 委嘱状の交付
- 3 教育長あいさつ
- 4 協議事項  
委員長および副委員長の選任について (決定)
- 5 議題
  - (1) 平成31年度青梅市立美術館事業計画(案)について (資料1)  
事務局から説明 (了承)
  - (2) 公募展ビエンナーレOMEの今後について(資料2)  
事務局から説明 (了承)
- 6 報告事項
  - (1) 特別展「ダンボールアート遊園地」の開催結果について (資料3)  
事務局から説明 (了承)
  - (2) 青梅市立美術館の臨時休館について(資料4)  
事務局から説明 (了承)
  - (3) 美術館と郷土博物館の統合の検討について  
事務局から説明
- 7 その他
- 8 閉会

[主な質疑・応答・意見(議題・報告事項について)]

○平成31年度青梅市立美術館事業計画(案)について

(委員) 企画展と特別展の開催回数は、それぞれのバランスが決められていて決定されるのか。また、平成31年度は5本を予定しているが、展覧会の種類は毎年決まっているものなのか。

(事務局) 特別展の実施に際しては、企画会社から買う方法、他館から作品を借りる方法があるが、いずれも館蔵品以外のもので展覧会を実施するには手間と予算が必要となる。当館の予算規模では年に1本特別展を

開催するのが限界である。来年度は、燻蒸や2月3月に休館を予定しているため、それらが無いときと比べれば1～2本少ない。特に毎年決まった種類の展覧会をしているわけではないが、現在の体制において、年間どのくらいの本数を開催するのが適正なのかを考えていかなければならないと思っている。

(委員) 特別展中島潔展は、今、巡回中の作品を展示するのか。

(事務局) この展覧会は、企画会社が素案をもって、そこから作品をセレクトして、作品の数量はある程度柔軟に対応できるタイプの展覧会である。来年度に関しては、作品のセレクトおよび会期は当館で決められるので、会期中の展示替えは可能になる。

#### ○公募展ビエンナーレOMEの今後について

(委員) 応募点数が下がってきた要因は何か。

(事務局) 多摩秀作美術展が隔年になってビエンナーレが始まり、応募条件が都内在住に緩和され応募対象者を広げたが、人数的には大きく増えなかった。要因として、審査員が替わったことにより選ばれる作品も変わることから、今まで入選していた人たちが落選し、以降出品しないということが起こった。また、2点まで出品できたのが1点になったため、このことも作品数が減った要因になった。新人発掘を掲げても多摩地区限定では発掘できる範囲が限られているので、応募方法と実態が一致しない状況にある。

(委員) ビエンナーレを終わりにしても、ほかの企画が無いとそれこそジリ貧になってしまう恐れがある。これはこれとして任務は終わったと思うが、新たな企画展を求められるのではないかと思うがどうか。

(事務局) ビエンナーレ展は廃止の方向にあるが、それに代わるものとして、地元で活動している作家たちと連携して共催展を行うなど、企画をリニューアルして展開していくことも考えている。

#### ○特別展「ダンボールアート遊園地」の開催結果について

(委員) ダンボールアート遊園地にたくさんの子供たちが美術館に足を運んでくれたということが、喜ばしいことである。来年度は子供の企画は入っていないが、市民会館の跡地に新生涯学習施設が来年の春に開館すると、施設ができることによって人の動きが変わっていく。変わる市民の動きをこちらに足を向かせることが出来るようなことが考えられないのかと思う。

(事務局) 来館者は、お母さんが子供を連れてくることが多く、圧倒的に女性

が多かった。展覧会開催に当たっては、一昨年、他県の美術館で開催したノウハウを参考に、何が起こり得るかを聞き、特に怪我の関係については傷害保険の加入など相応の準備をした。幸いにして大きな怪我や事故はなく、会期の終了を迎えられたことは非常に良かったと思っている。

#### ○青梅市立美術館の臨時休館について

(委員) 収蔵品のデータ取得・管理のための休館とのことだが、本来、美術館には、管理する専門家が重要だと考えている。日本の多くの学芸員は、役割を全部一人で行っている状況にあり、収蔵品の管理は、作品の保全という美術館事業の基礎といえる大変な作業である。作業は学芸員一人で行うのか。また、収蔵品管理システムはあるのか。

(事務局) 件数が多いので、学芸員と事務職員で行う予定である。管理システムはまだ導入していない。現在、基礎となるデータの収集を行っているところである。

#### ○美術館と郷土博物館の統合の検討について

(委員) 美術館も博物館も、館の持っている特性や地域性を踏まえて、収蔵品を後世の人たちに伝えていくことが大きな目的である。そこをどのようにクリアするかが最大のポイントになる。子供たちやこれからますます高齢化していく社会の中で、たくさん人が集うような、集えるスペースを持つというのが重要かと思っている。統合は大変な作業になると思うので、今日は意見交換と言うよりはむしろ率直な意見を委員にお聞きしたい。

(委員) この問題に関しては、青梅市はこの20年位様々な企業が撤退している現状から、市の長期計画を考えた場合、文化都市青梅を前面に掲げる形で進めないと将来ダメになるのではないかと危惧している。美術館が開館した時も、遠い将来、文化のまち青梅を標榜してそれで行こうという考えだった。そのような考えに沿って将来に対して投資、施設等を拡充していく時に、ここに出された統合の資料を見ると、撤退的縮小のような感じがする。市内には玉堂美術館、吉川英治記念館、櫛かんざし美術館、奥多摩町のせせらぎの里美術館などいろいろあるが、都内に住んでいる人から見ると、青梅に行けば文化に触れられるということ想像した時に、それらの美術館が一体化しているように見えないという。博物館をここに統合するのであれば、人寄せのために発展的に拡充していくのであればいいと思うが、最近の流れを見て

いると、全部縮小していくような気がする。

(事務局) 青梅市の現状としては、人口や税収の減少がある中で、公共施設の再編という全体的な計画の見直しが迫られている。市では非常に厳しい予算状況が何年も続いており、企業の撤退による法人税減少の影響も大きな要因となっている。そこで、市内の施設について、維持管理費、人件費等の見直しから、美術館や博物館等の文化施設にもメスが入ってきた。美術館、博物館を市の全体計画の中で今後どうしていくか検討するため、皆様方にご意見を伺いたいと考えている。

(委員) 文化は一番初めに波が来るとというのは、幾度も実感している。他の行政でも見ているが、一度撤退するともう戻れない。今、子育ての問題とか色々なことでお金がかかる。これまでとは違ったお金のかかり方をしているのを実感している。

(委員) 美術館と博物館と言うのは、違う意味合いを持っているもので、所蔵品に関しても違うものがあるのは明らかだが、それを統合することが本当にできるのかどうか、疑問に思うところである。子育ての問題など懸案となっている課題がたくさんある中での統合ということだと思う。統合に当たっての取り組み、統合が前提となっているように見受けられる。改めて確認するが、統合ではない別の意見を出してもいい、ということか。新しく建設予定の教育文化施設と東青梅1丁目の仮設駐車場に予定する施設の中にもこの内容を組み込む、というような意見を出しても大丈夫なのか。

(事務局) 今建設中の文化交流センターは、今年中にはできてしまうのでその中に入ることは無理である。東青梅1丁目の施設についても、設計が出来ているので、当初はその施設に美術館や博物館を移転する計画もあったが、再編計画の中で青梅地区に賑わいを継続させるために美術館を残すということになったので、どちらにも入ることはできない。

(委員) この件に関しては縛られないご意見を出していただいた方がいいし、今の条件だけで考えると出口が見えなくなりそうなので、思い切ったドリームプランをご提案していただいてもいいと思う。なるべく多様な意見から、市の方でヒントを得て、いいアイデアと作るということもあると考える。

閉 会